

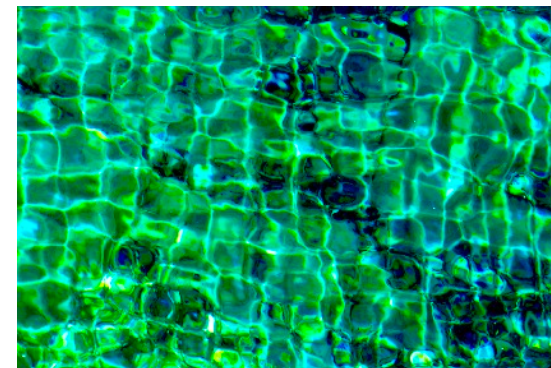
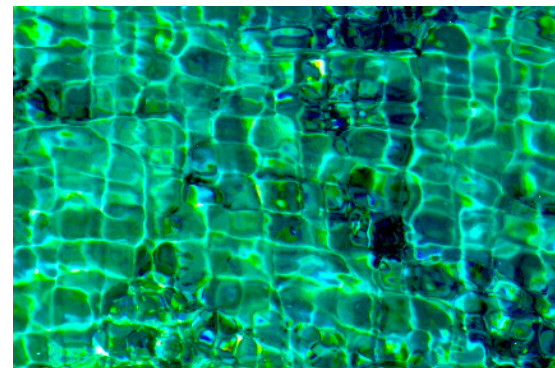
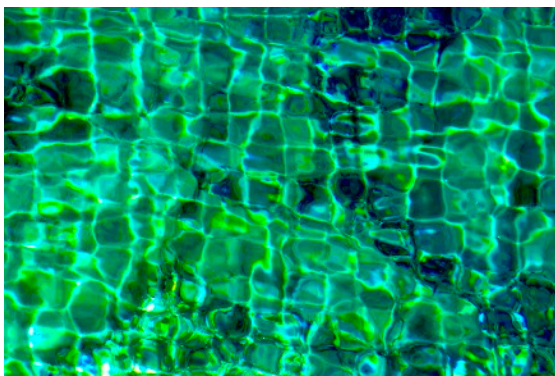
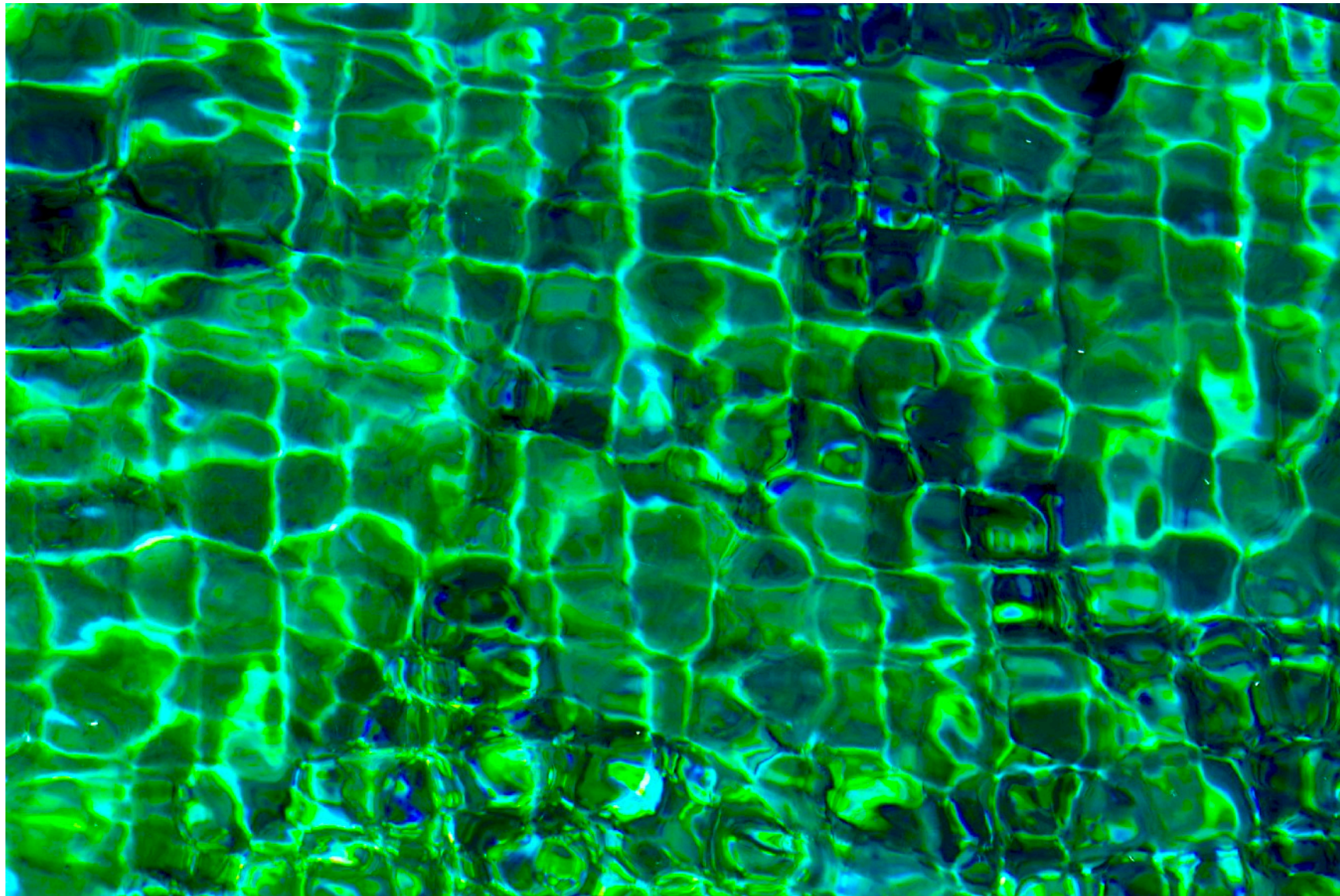
神秘学ポエジー 風遊戯
photopos
100

【神秘学ポエジー～風遊戯 第200集】 photo ヴァージョン

photopos 2476-2500

《2021.6.18～2021.7.12》

神秘学遊戯団



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

子どもは
知らないから
知らないでいる
そして
いつもあたらしい

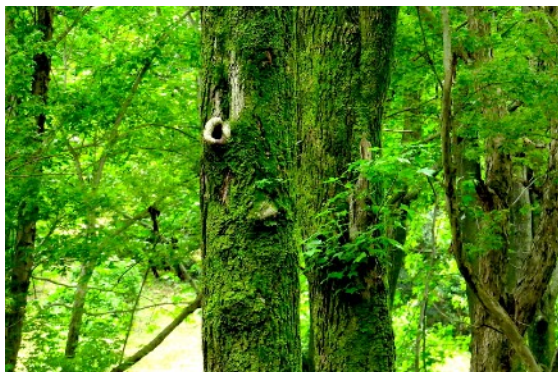
大人は
知っていると思い
ほんとうは知らないでいる
そして
あたりまえを生きている

子どもも
いつか大人になり
あたりまえを生きようとするだろう

大人は
かつて子どもだったが
そのことを思い出せずに生きている

富んでいる者が神の国にはいるより
らくだが針の穴を通る方がやさしい
というがそれは
あたりまえを生きている大人が
子どものように
知らないでいるようなものだ

ほんとうに知ることは
知らないでいること
そのことに気づくことさえできれば
大人になっても
いつもあたらしく生きられるのに



※愛媛県総合運動公園にて

人が人になるためには
阿呆になれなければならぬ

阿呆になれないとき
人は賢くみられようとしてしまうから

賢くみられたがることはむしろ
度しがたくなるだけなのに
それに気づけないでいる

いまの時代は
お金や評価につながらないことにばかり
手間暇かけることを阿呆とみなす

いまの時代の賢さは
お金や評価を勝ち得る賢さでもあるからだ
ボランティアさえ
点数化され評価される時代なのだ

けれどみんなほんとうは
心の底では気づいているのだ
その賢さの果てになにがあるのかを

そしてそれに抗えずに
じぶんも賢い顔をつくらうとし
みんな同じ顔をしてつくり笑いをするばかり

その仮面の裏では
じぶんの顔がなくなっていただけなのに

阿呆になるんだ
たとえ阿呆鳥の名の由来のように
すぐには逃げないから
捕殺されてしまうのだけだとしても

阿呆になるんだ
阿呆になることでしか
あの賢さから逃れる術はないのだから

阿呆になれたとき
人はようやく人になれるのだから



世界を
要約することはできないから
わたしは
世界を生きている

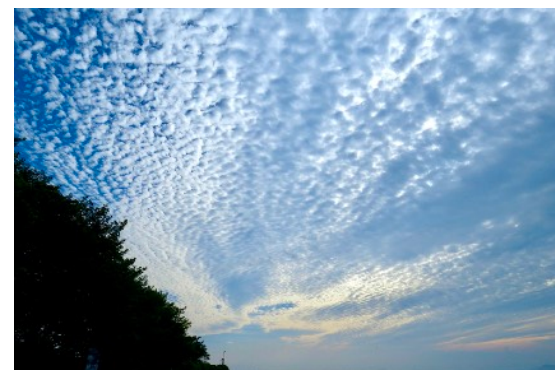
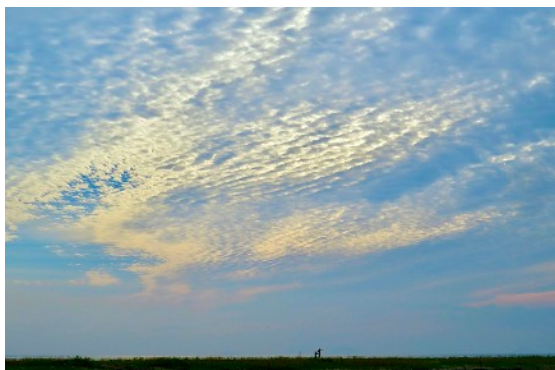
そして
世界を生きただけ
わたしは世界となることができる

世界に
意味も無意味も求める必要はない
わたしは
世界を生きることで
世界を物語ることができるだけだが
それが世界創造にほかならないからだ

わたしを
要約することはできないから
わたしは
わたしを生きている

そして
わたしを生きただけ
わたしはわたしとなることができる

わたしに
意味も無意味も求める必要はない
わたしは
わたしを生きることで
わたしを物語ることができるだけだが
それがわたしの創造にほかならないからだ



※愛媛県松山市・重信川河口にて



なぜは
どこにでも
あるけれど

なぜを
ほんとうの
食べものにするためには

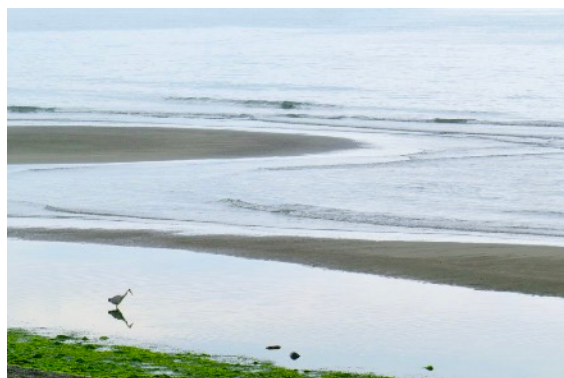
なぜ
なぜと問うのかを
まず問わなければならない

じぶんへの
問いではないなぜは
ただ通り過ぎる好奇心だから

好奇心は好奇心を生むが
それはどこにも
わたしを導いてはゆかない

じぶんへのなぜは
好奇心の狂騒を離れ
魂の旅へと導いてくれる

じぶんへのなぜは
無限の彼方のじぶんへと向かい
やがて今このじぶんへとつながる





水は
ただ水ではない

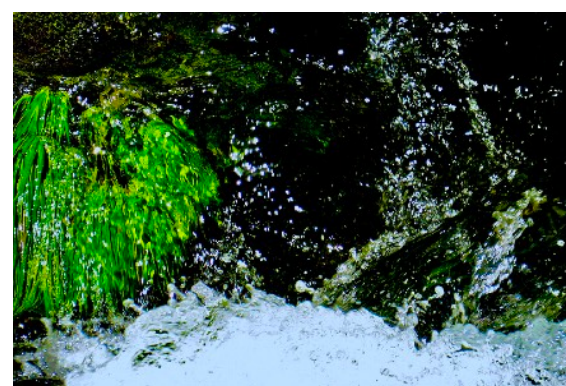
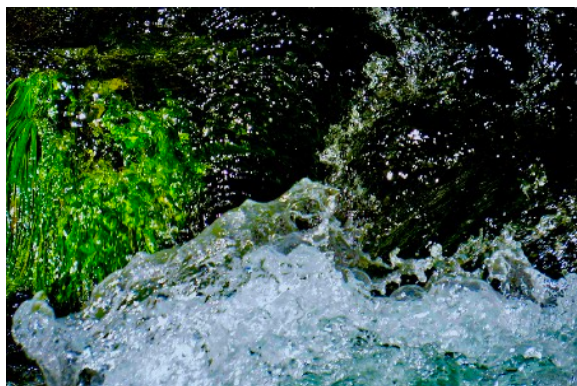
水は
地と
風と
そして
光という
友とともに
踊っている

水よ
我とともにある水よ
我とともに踊れ

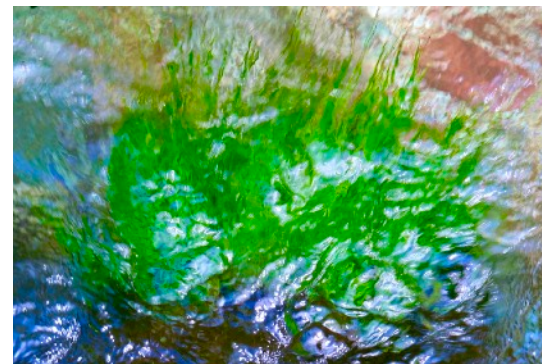
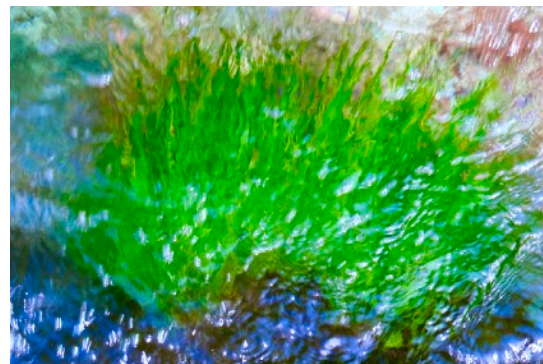
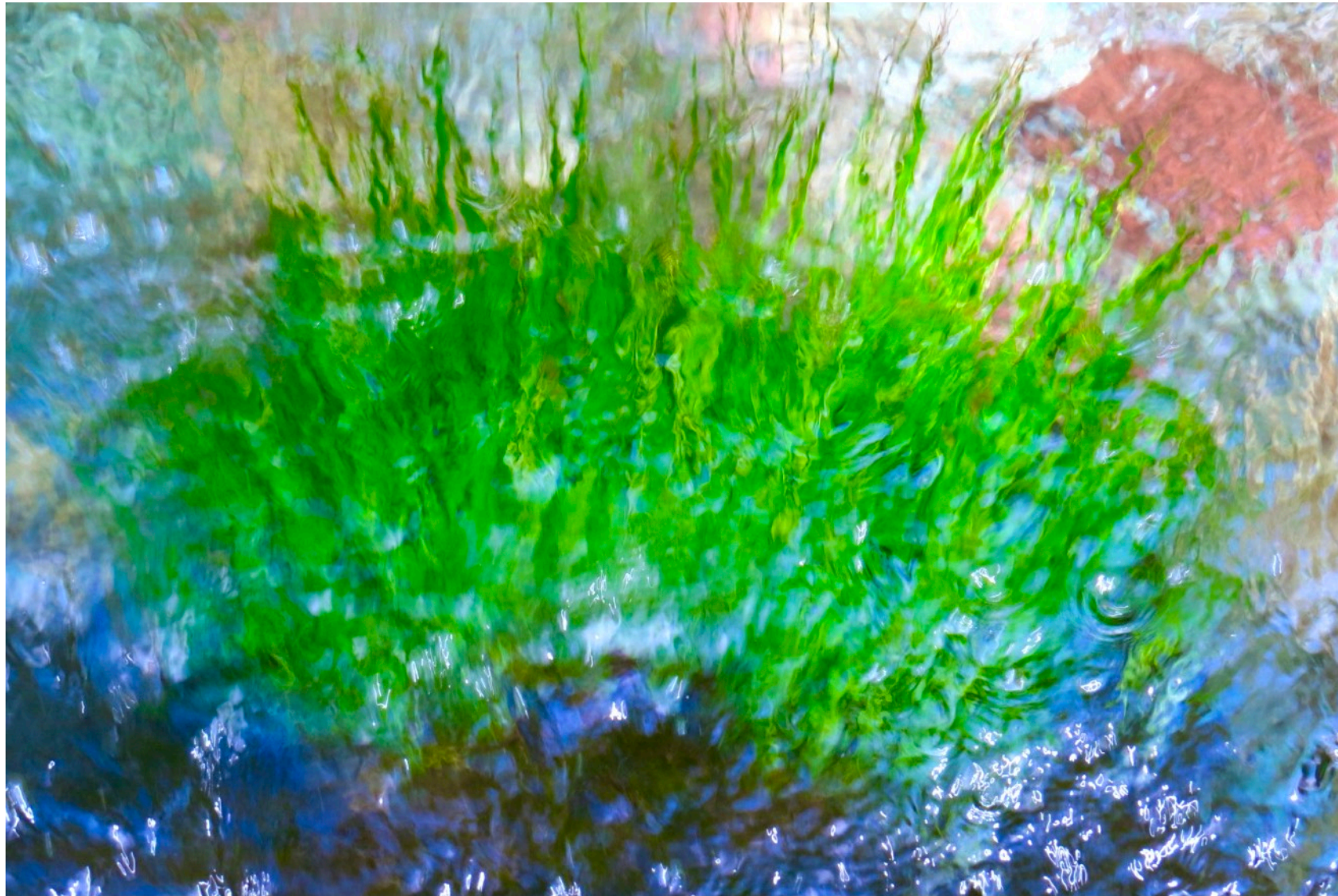
心は
ただ心ではない

心は
身体と
言葉と
そして
精神という
友とともに
長い道を歩んでいる

心よ
我とともにある心よ
我とともに歩め



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

歌いたいなら
歌えばいい

けれど
歌うのは
じぶんの歌だ

借り物の歌は
どこにも
帰ってゆく場所がないから

癒やされたいなら
癒やされればいい

けれど
癒やすのは
じぶんの力だ

癒やしてもらおう力さえ
ほんとうは
じぶんのなかにある力だから

知りたいなら
知ればいい

けれど
知ることができるのは
ただ忘れていたことだけだ

じぶんで学んだことでなければ
だれからも
教えてもらうことはできないから



※愛媛県松山市・北条にて

わたしがいて
あなたがいて
わたしとあなたがいて

わたしからあなたへ
あなたからわたしへ

かぞえきれないほどの
ところ
からだ
ことばが
つながってゆき

かぞえきれないほどの
つながりかたで
かぞえきれないほどの
わたしとあなたの
ものがたりはうまれてゆく

わたしは
あなたの
ところ
からだ
ことばを
ほんとうのたべものにして
いきているから

わたしのなかには
あなたがたしかにいて

あなたがいなければ
わたしは
いまのわたしはいない

わたしがいて
あなたがいて
そうして
せかいはまわってゆく



振り返ってはならないもの
振り返らねばならないもの

振り返って見てはならないという
約束を守れないで
失われてしまうものがある

オルフェウスは
冥界のエウリュディケーを
イザナギは
黄泉のイザナミを見るために
振り返ってはならなかったのだ

けれども
振り返らねばならないときは
振り返らねばならない

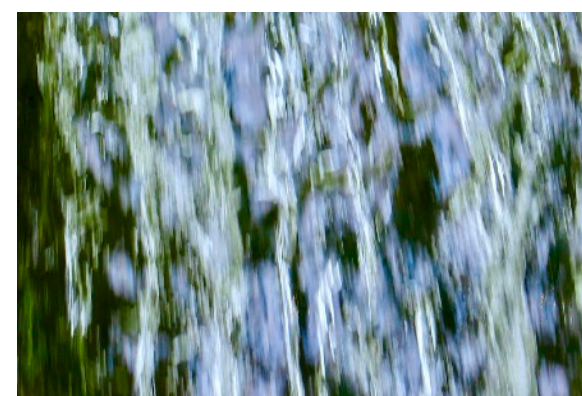
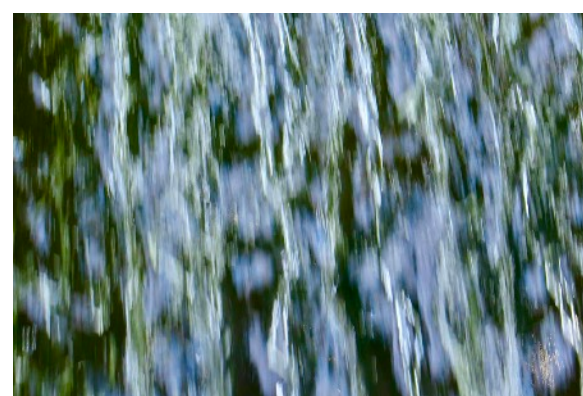
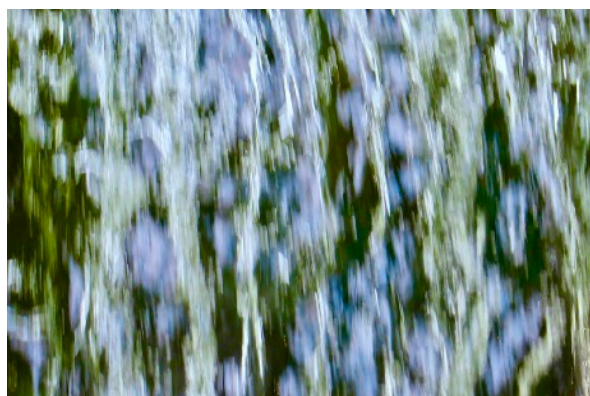
振り返らなければならないのは
みずからの姿だ
ここに至ることになった理由

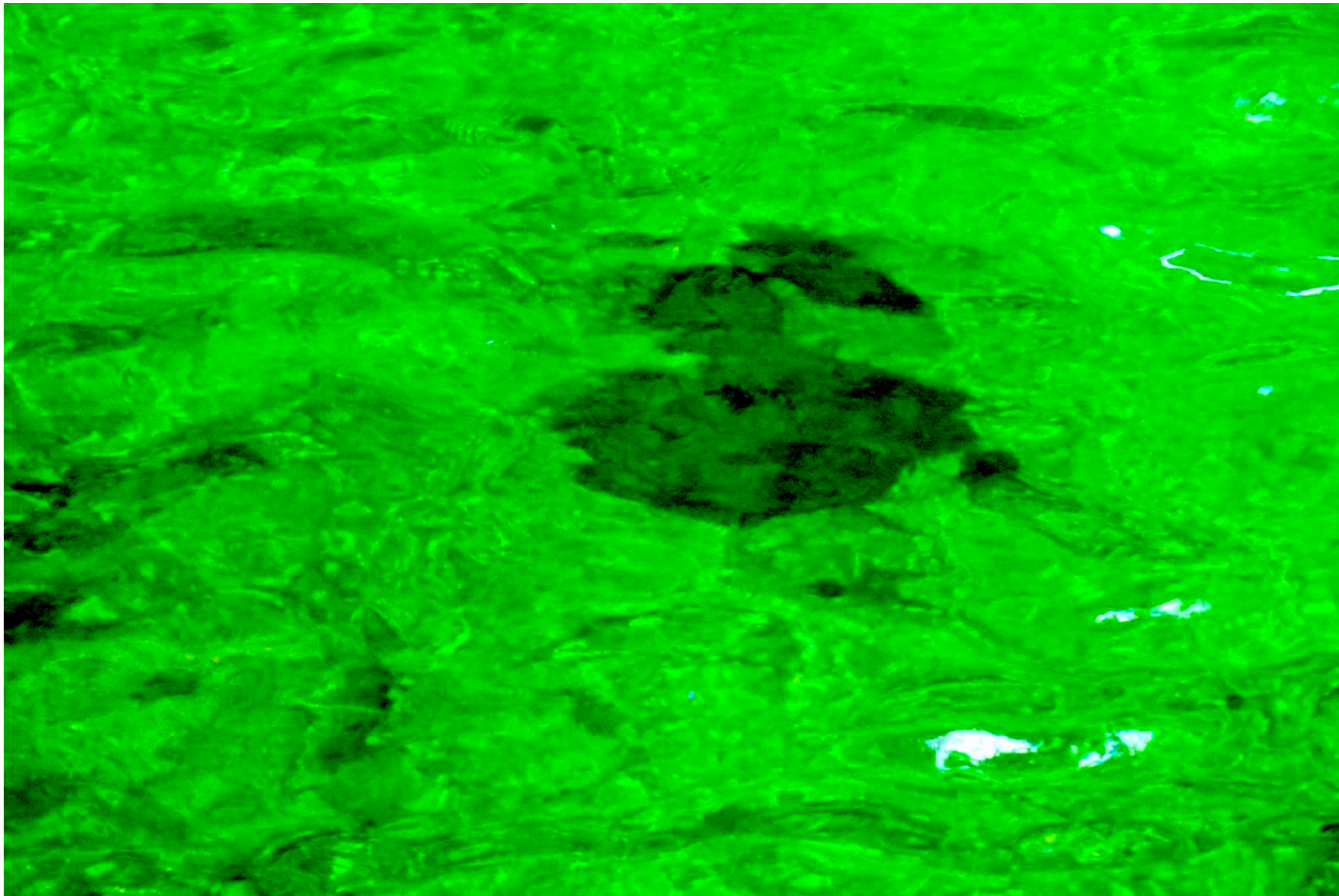
時は過ぎてしまったとしても
過ぎてしまったからこそ
みずからの辿ってきた道を
たしかに見なければならぬのだ

オルフェウスのその後
イザナギのその後の真実は知らないが
新たな時代のオルフェウスは
新たな時代のイザナギは
むしろみずからの姿をこそ
振り返らなければならないだろう

その姿のなかにこそ
冥界のエウリュディケー
黄泉のイザナミを
照らし出さなければならない

そのときはじめて
オルフェウスとエウリュディケーは
イザナミとイザナギは
新たな姿でむすばれることができるはずだから





言葉があるから
ひとはそれで何かを伝えている
伝えようとしている

わたしはこうして
言葉を使って
言葉について
問いかけているけれど

言葉があるから
言葉では伝えられないものを
伝えられなくなっているのかもしれない

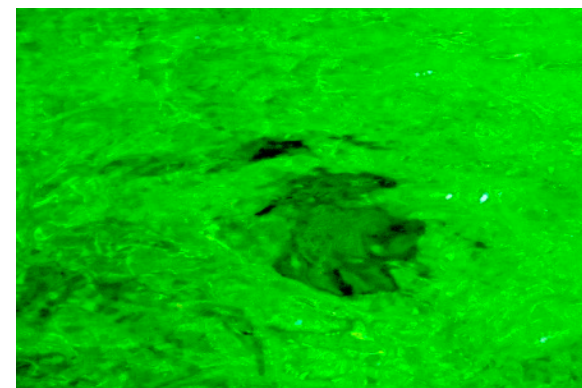
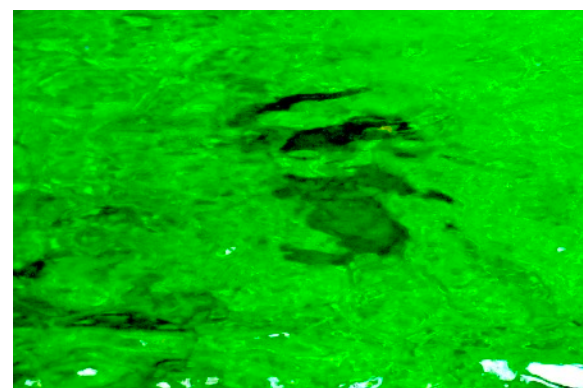
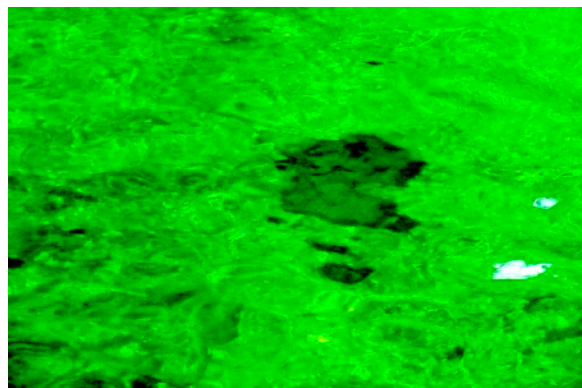
言葉とは
いったいなんなのだろうか

文字があるから
ひとはそれで何かを伝えている
伝えようとしている

わたしはこうして
文字を使って
文字について
問いかけているけれど

文字があるから
文字では伝えられないものを
伝えられなくなっているのかもしれない

文字とは
いったいなんなのだろうか



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



眼のなかに
光があるから
見ることができるのならば

耳のなかに
歌があるから
わたしたちは聴くことができ

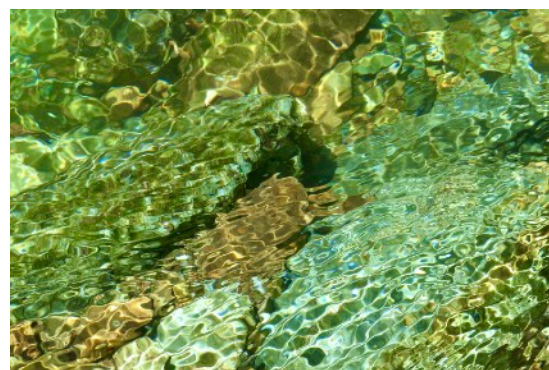
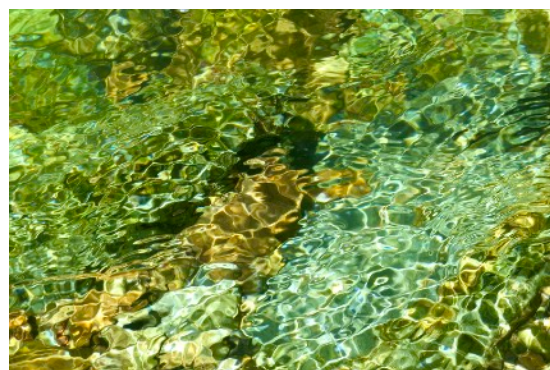
声のなかに
言葉があるから
わたしたちは語る事ができ

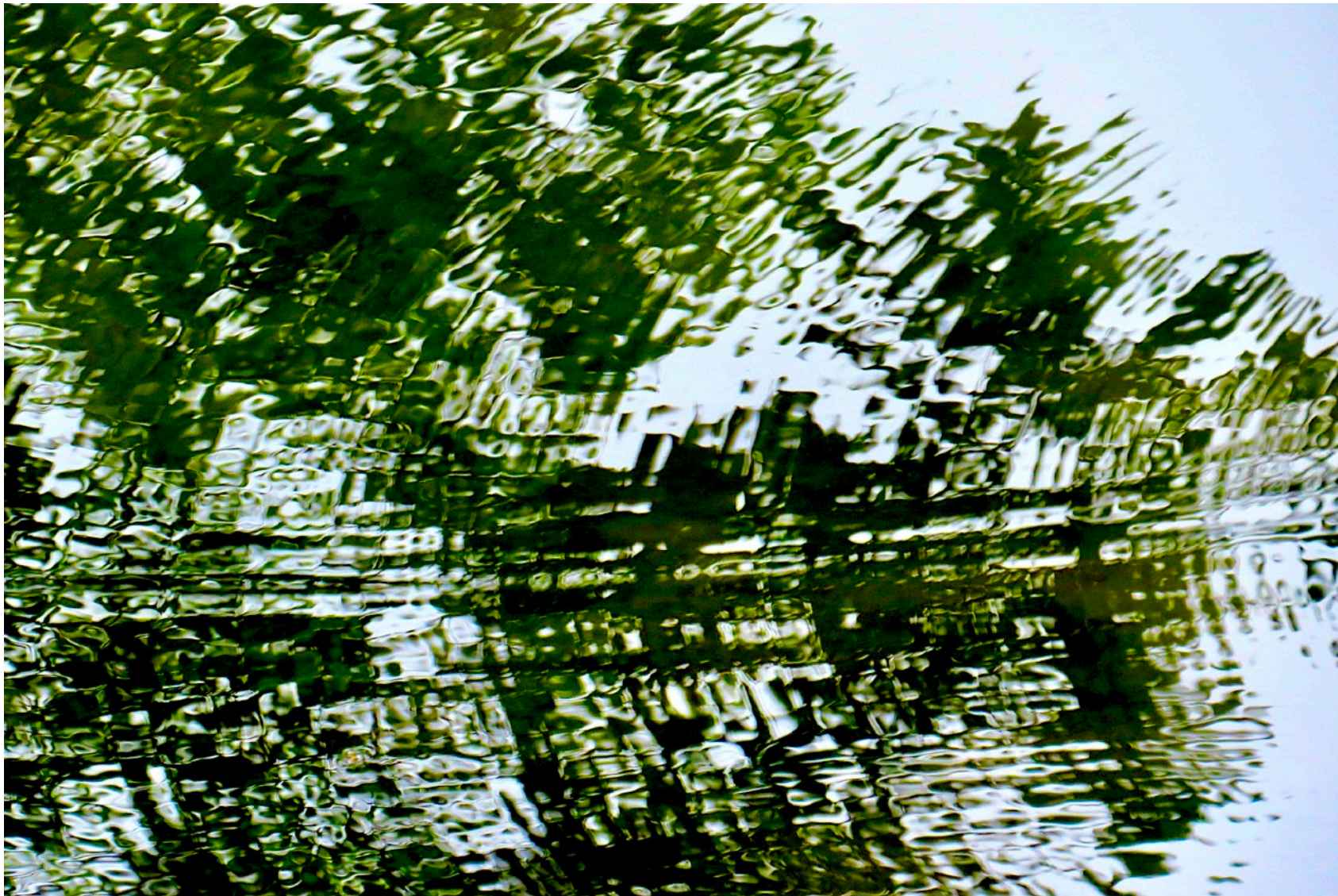
手のなかに
形があるから
わたしたちは作ることができ

脚のなかに
動きがあるから
わたしたちは歩くことができ

心のなかに
時があるから
わたしたちは時めくことができ

そして
わたしたちのなかに
愛があるから
わたしたちは愛を生きることができる





自然がまだ
かつての
自然だったころには
もう戻れはしない

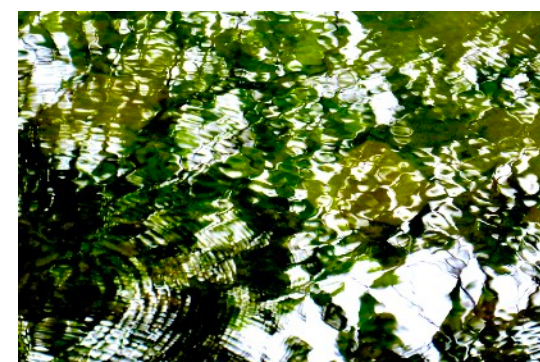
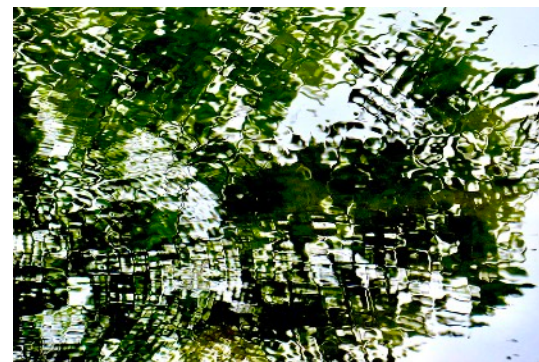
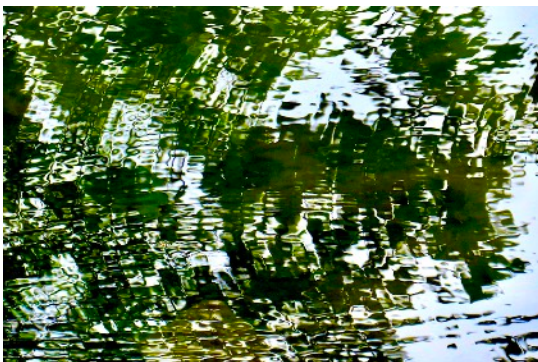
だから自然は
自然を超えて
まだ見ぬはるかな姿へと
変容していかなければならない

ロゴスがまだ
ロゴスでない
ピュシスであったころには
もう戻れはしない

だからロゴスは
ロゴスを超えて
まだ見ぬはるかな時空を
生み出さなければならぬ

わたしがまだ
わたしでない
わたしだったころには
もう戻れはしない

だからわたしは
わたしを超えて
まだ見ぬはるかな自由を
生きなければならぬ





暦とは
季節を象る
抽象図形だから

そこに息を宿らせ
歌わせるためには
鳥たちのはるかな渡りを思い
虫たちの驚くべき羽化を詩にして
季節のうつりのなかを
みずから生きねばならない

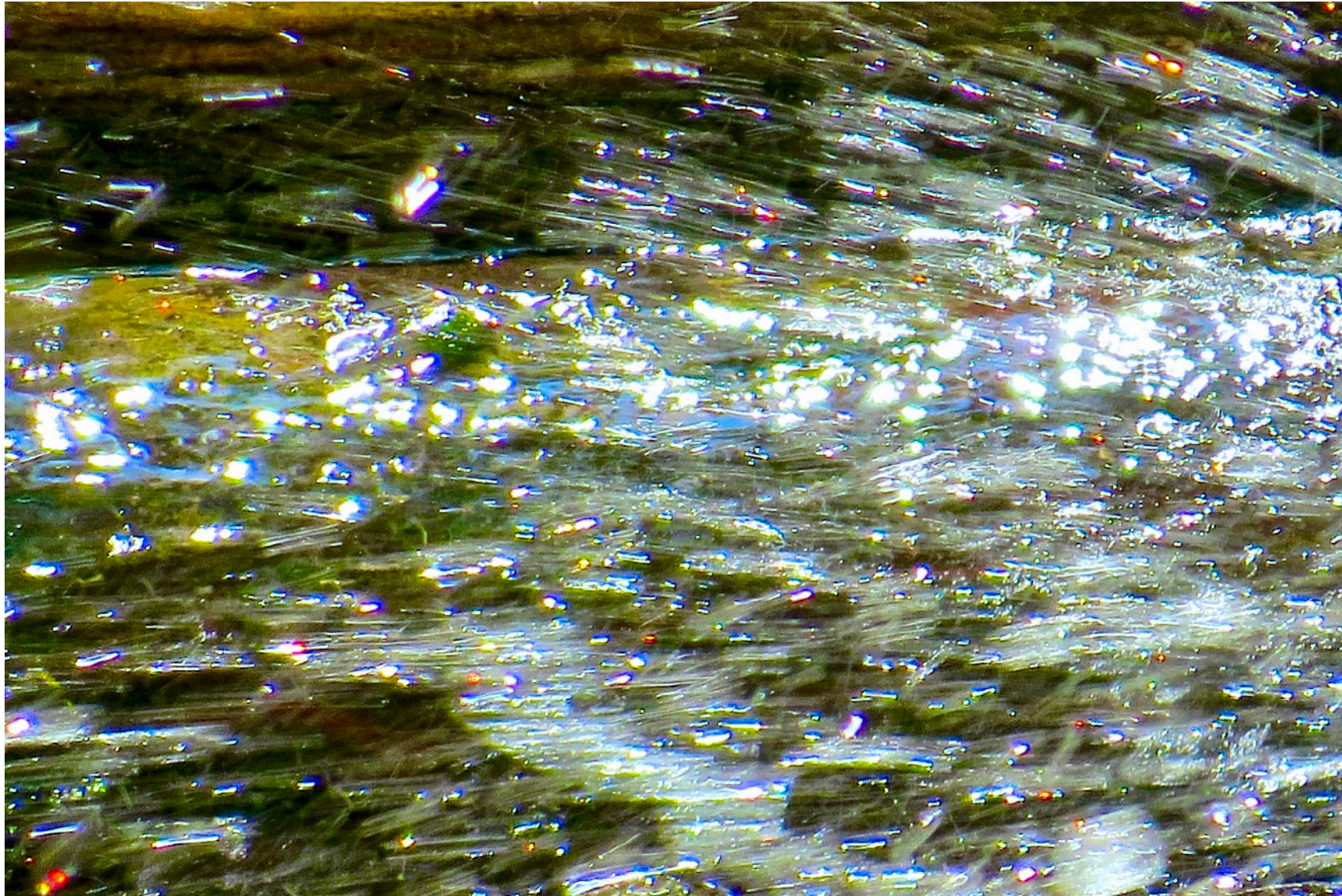
時計は
時を象る
抽象機械だから

そこに心を宿らせ
語らせるためには
呼吸の満ち引きとともに
光と闇の衣を纏い
意識のうつりのなかを
みずから生きねばならない

すると
星たちは螺旋を描き
四大は戯れ遊び
黙し続けていた魂は
イメージを解き放ち
秘密曼荼羅を描きはじめる



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



生きることは
光と影のタペストリー

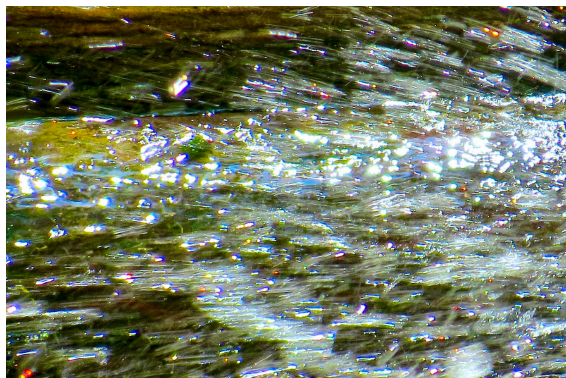
光だけ
影だけでは
魂を織ることはできない

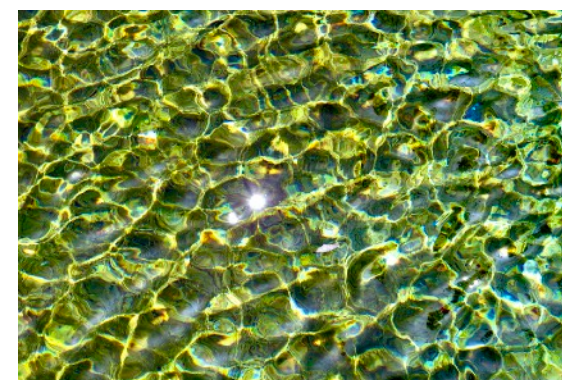
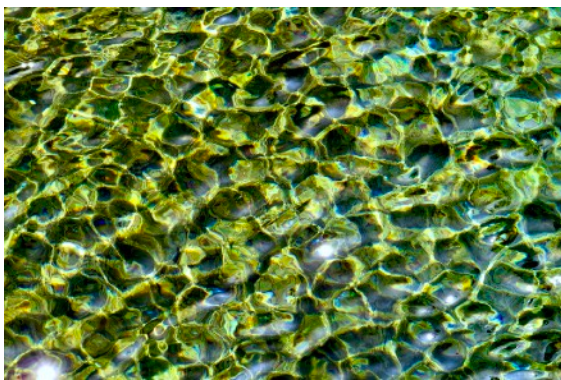
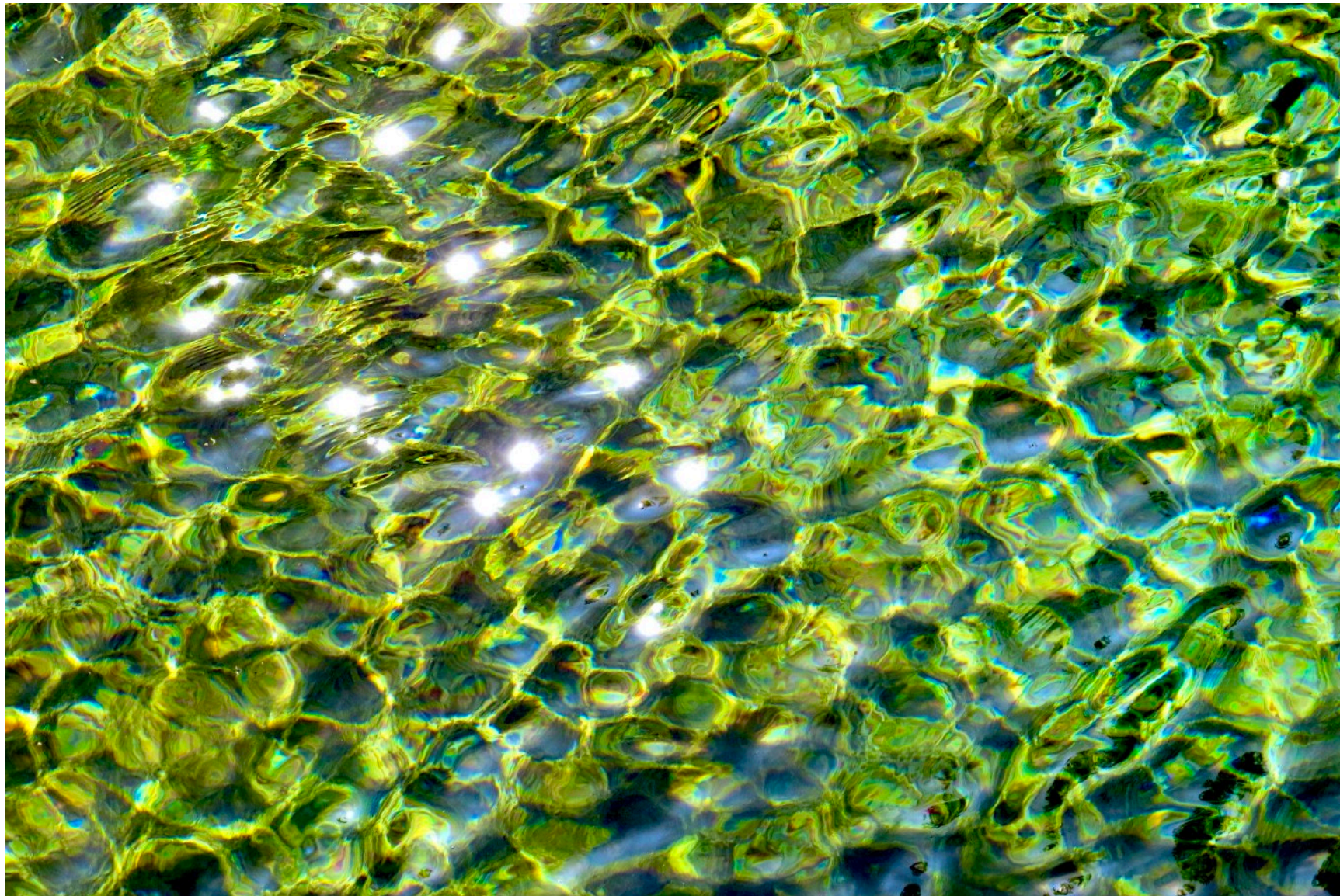
その縦糸と横糸で
じぶんだけの魂の形を
織りあげらねばならない

それはどんな形になるのだろう
光のパッションは
どんな色に染められるのだろう

わたしの形と色は
生という
世界劇場のなかで

狂おしく激しく
自由と不自由のあいだを
歌い踊りつづけている





かたちを生みだす
リズムとともに
わたしはわたしになり

かたちを変えてゆく
リズムとともに
わたしは変わってゆき

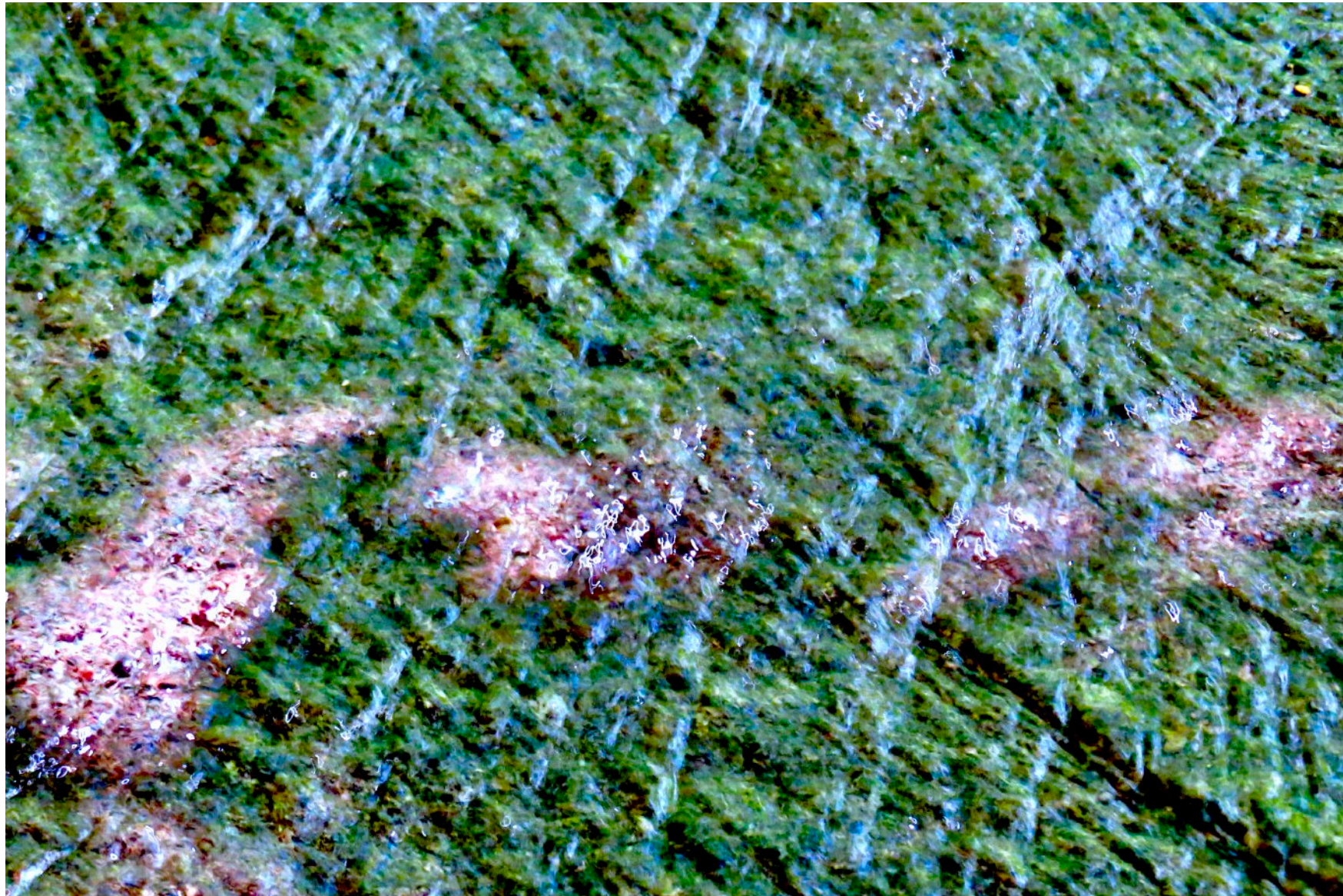
あなたのリズムと
わたしが会うことで
わたしは変わってゆき

わたしのリズムと
あなたのリズムは

出会い
絡みあい
ぶつかり合い
響き合い

あらたなかたちを
生みだしつづけ

リズムとともに
わたしたちは変わってゆき



なぜをずっと
さかのぼっていくと
どこにたどり着くのだろう

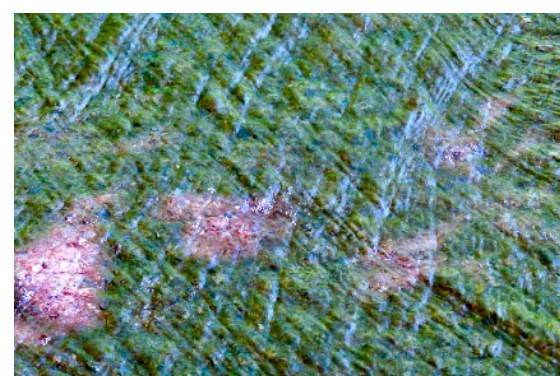
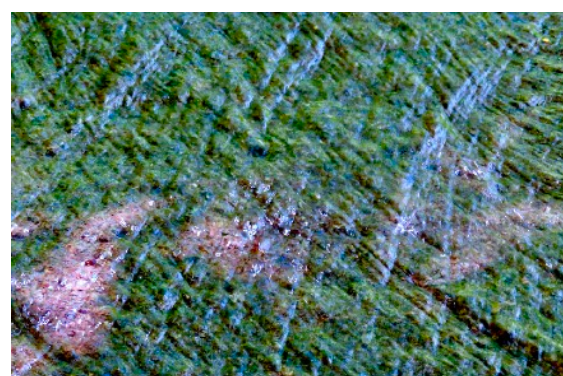
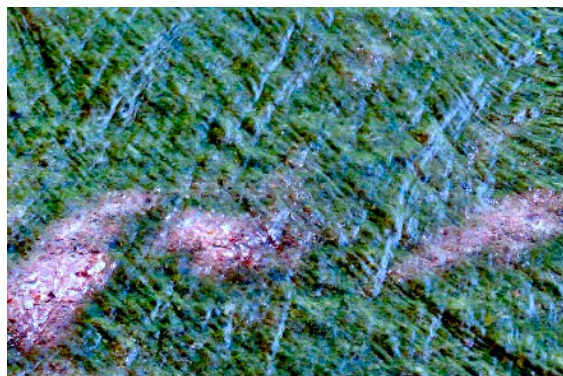
いいこと 悪いこと
正しいこと 間違っていること
すべきこと してはいけないこと

なぜのはじめの場所で
そんなすべては
どんな顔をして
語りはじめるんだらう

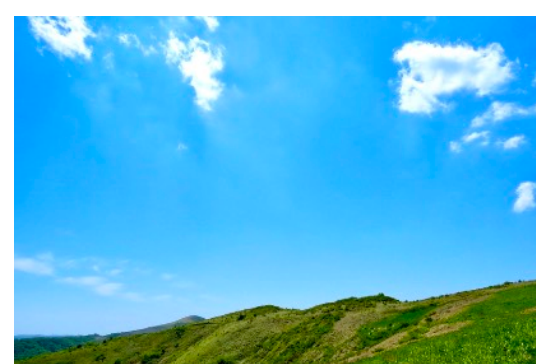
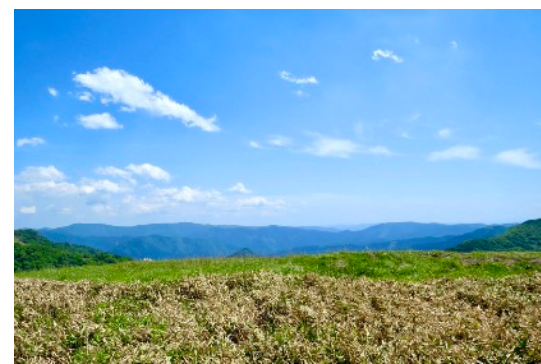
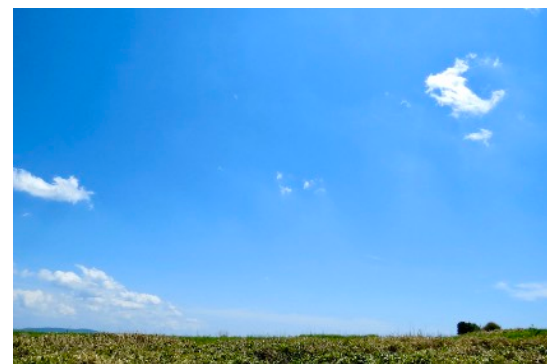
時間をずっと
さかのぼっていくと
どこにたどり着くのだろう

私のからだ 私のころ
光のからだ 光のころ
宇宙のからだ 宇宙のころ

時間のはじめの場所では
そんなすべては
どんな顔をして
生まれてくるんだらう



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



さあ夏を
呼吸するのだ

わからないを遊び
現から脱出し
夢へと脱出し

わかったふりを遊び
現へと脱出し
夢から脱出し

蝶の羽ばたき
鱗粉の魔法に
夢の時を過ごし

甲虫のメタル
驚くべき形態に
しばし我を忘れ

サイダーの
儂い泡の
淋しさを愛し

かき氷の
溶けゆく刹那の
甘き誘惑に溺れ

時空の
表から裏へ
裏から表へ
そして
表でも裏でもない
どこにもない場所で
遊び戯れながら

夏のわたしをこうして
ずっとずっと
彼方までつなげてゆけば
どんな永遠が見えてくるのだろう



空の彼方へ
わたしという
問いを放てば

私の背後から
世界という
問いが返る

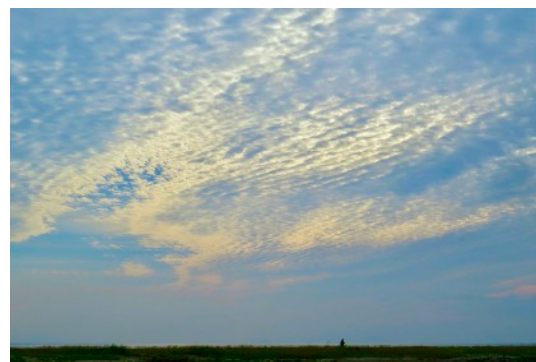
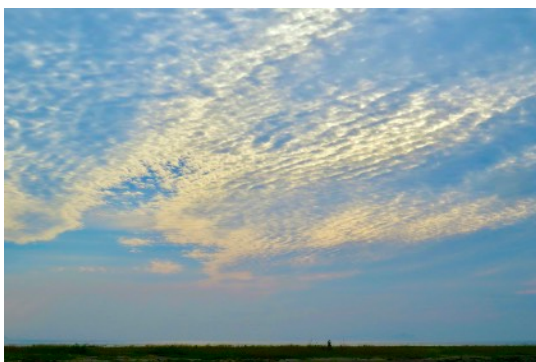
空の彼方へ
世界という
問いを放てば

世界の背後から
わたしという
問いが返る

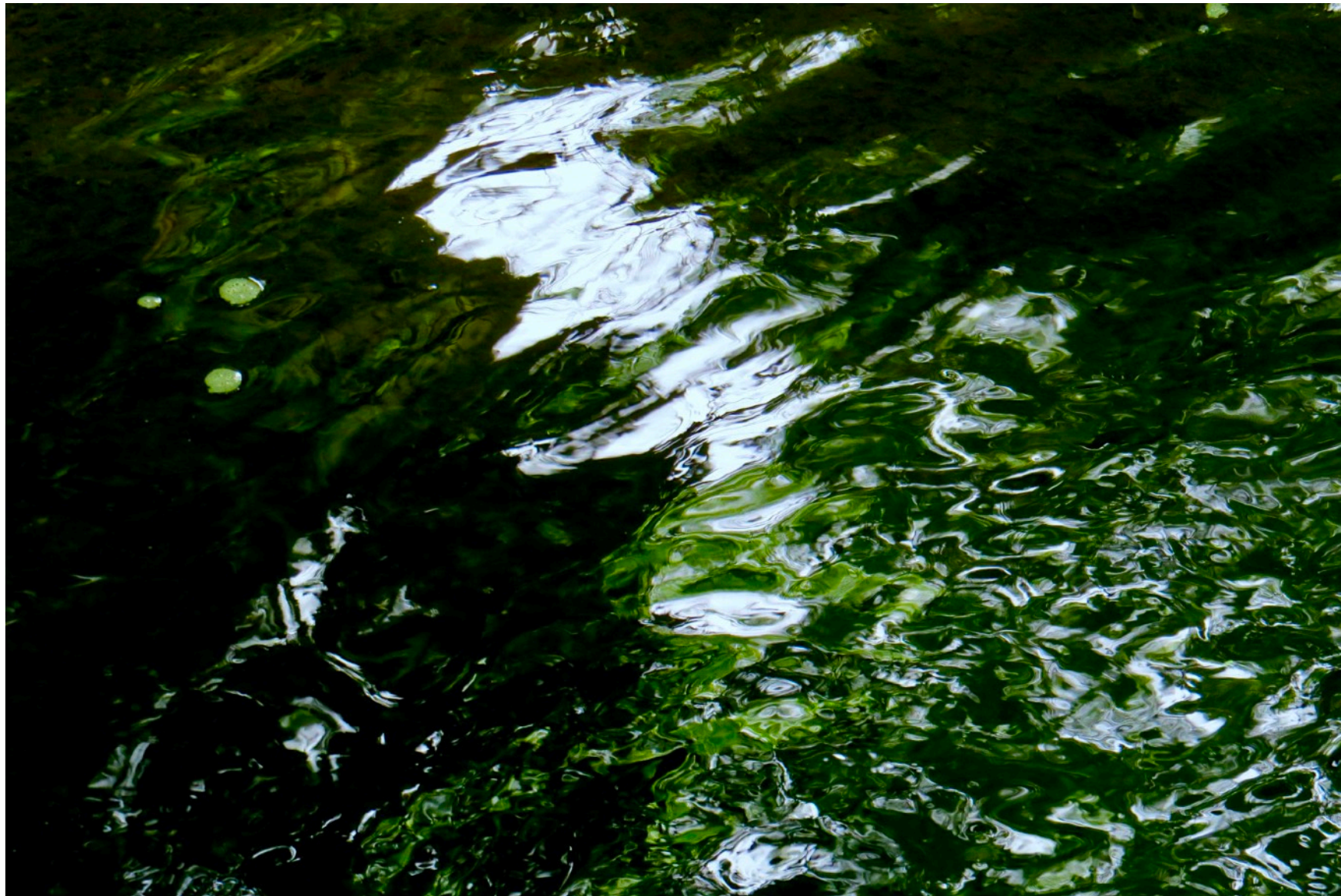
空は
わたしと
世界のあいだで

絶えず
問いに満ちて
彼方へ広がっている

わたしと世界の
永遠に繰り返される
呼吸のように



※愛媛県松山市・重信川河口にて



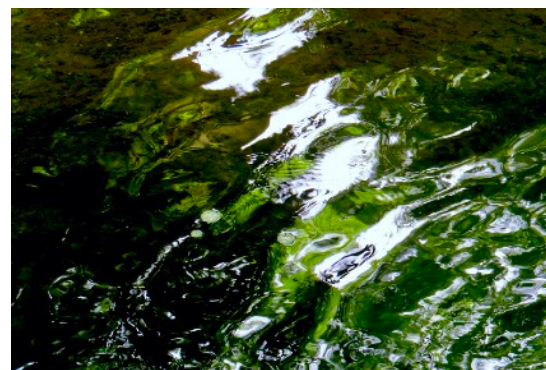
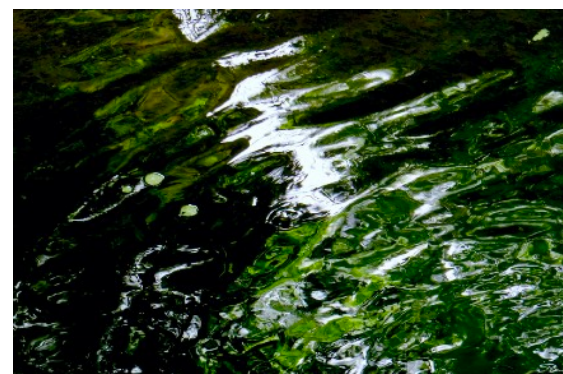
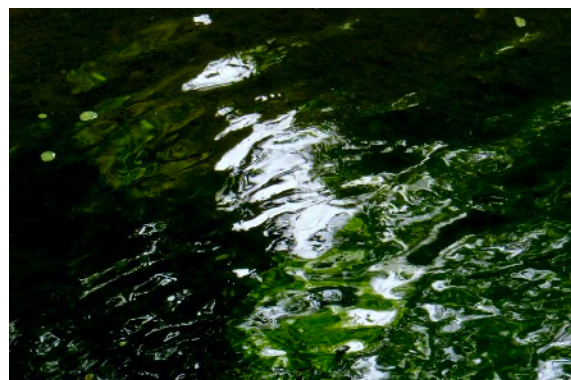
死は
終わりではない
深く生きること
はじめて得られる
再生の秘儀である

詩は
その秘儀を
死を超えた再生を
詠わねばならない

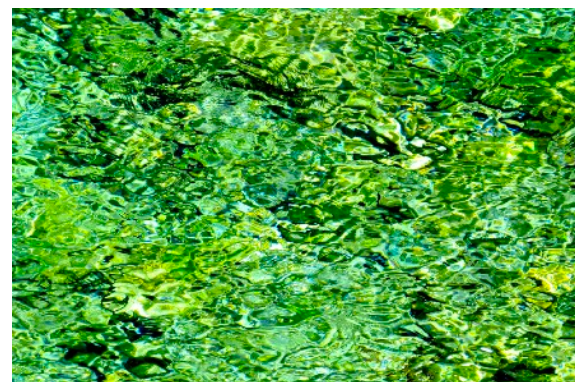
古い神話は
すでに終わりを告げた
新たな神話が
求められている

詩が
新たな秘儀として
開示されるとき

死は
再生の歌を奏でる
復活の秘儀ともなるのだ



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて



はじめ
ことばには
からだがあった

からだは
情念を宿し
聖霊とともにあった

聖霊は
ことばのなかで
歌となって響いた

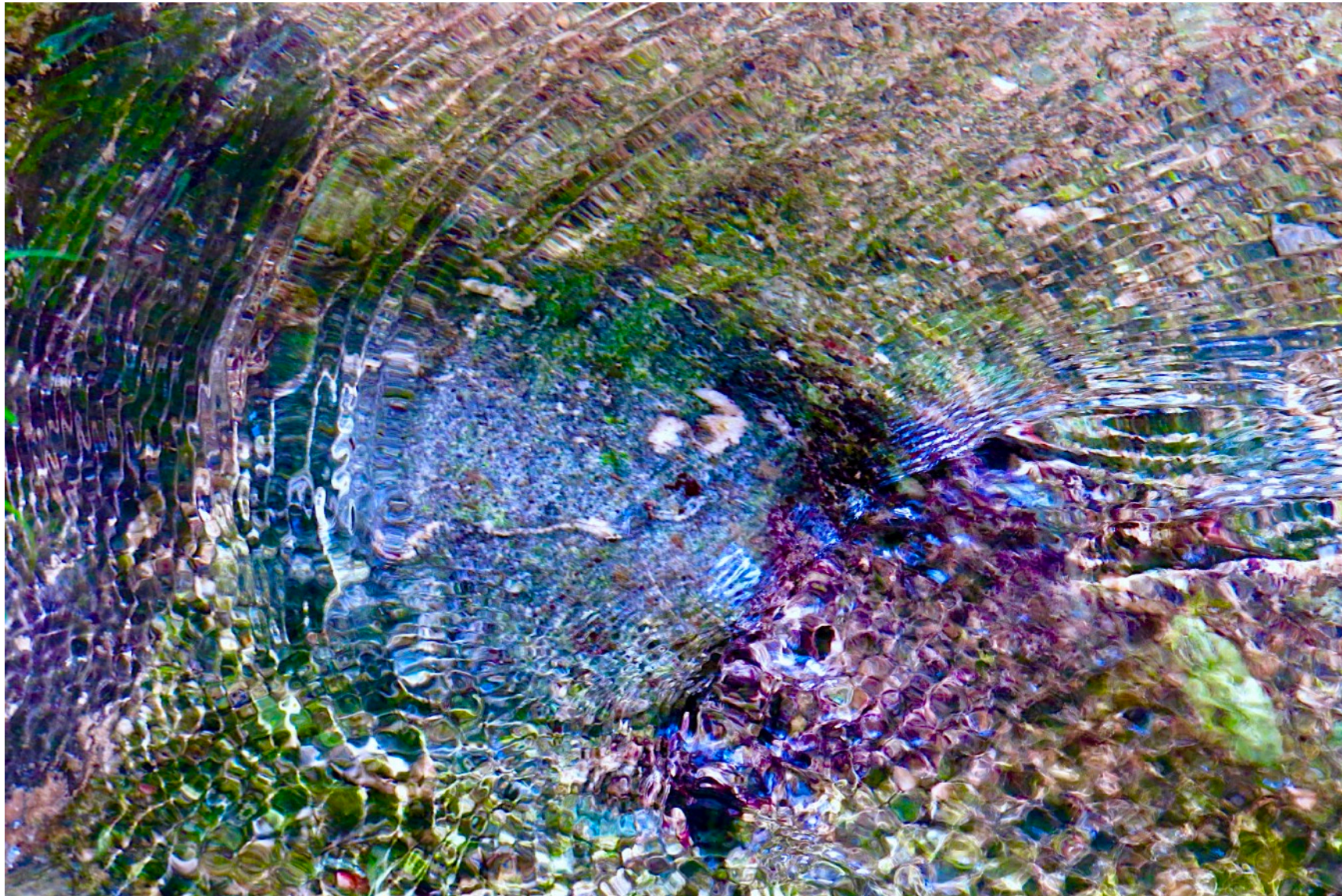
ことばが
知性と理性の
道具となったとき
論理は情念を追放した

そして
ことばから
歌は失われ
聖霊もそこから
姿を消してしまった

ことばに
聖霊を
呼び戻すために

ことばは
あらたなからだを
持たねばらない

知性も理性もそして情念も
ともに歌える聖霊を宿した
そんなあらたなからだを



宇宙とは
いったい
なんだろう

宇宙のもとを
ずっとずうっと
探していけば
見えない弦であるらしい

弦を奏でる
不思議の楽人
それが
宇宙の秘密らしい

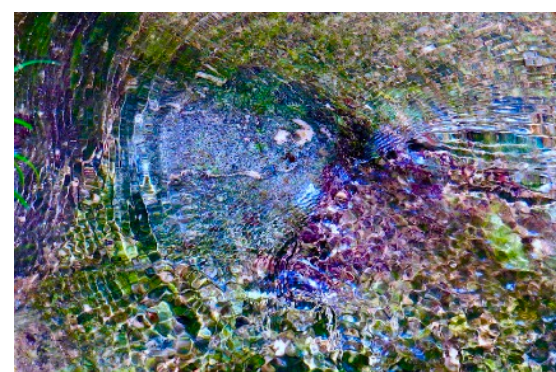
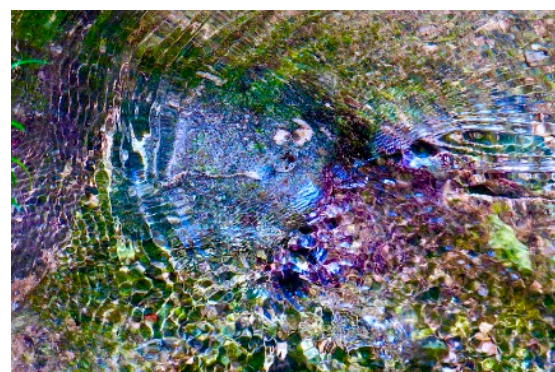
わたしは
いったい
だれだろう

わたしのもとを
ずっとずうっと
探していけば
見えない光であるらしい

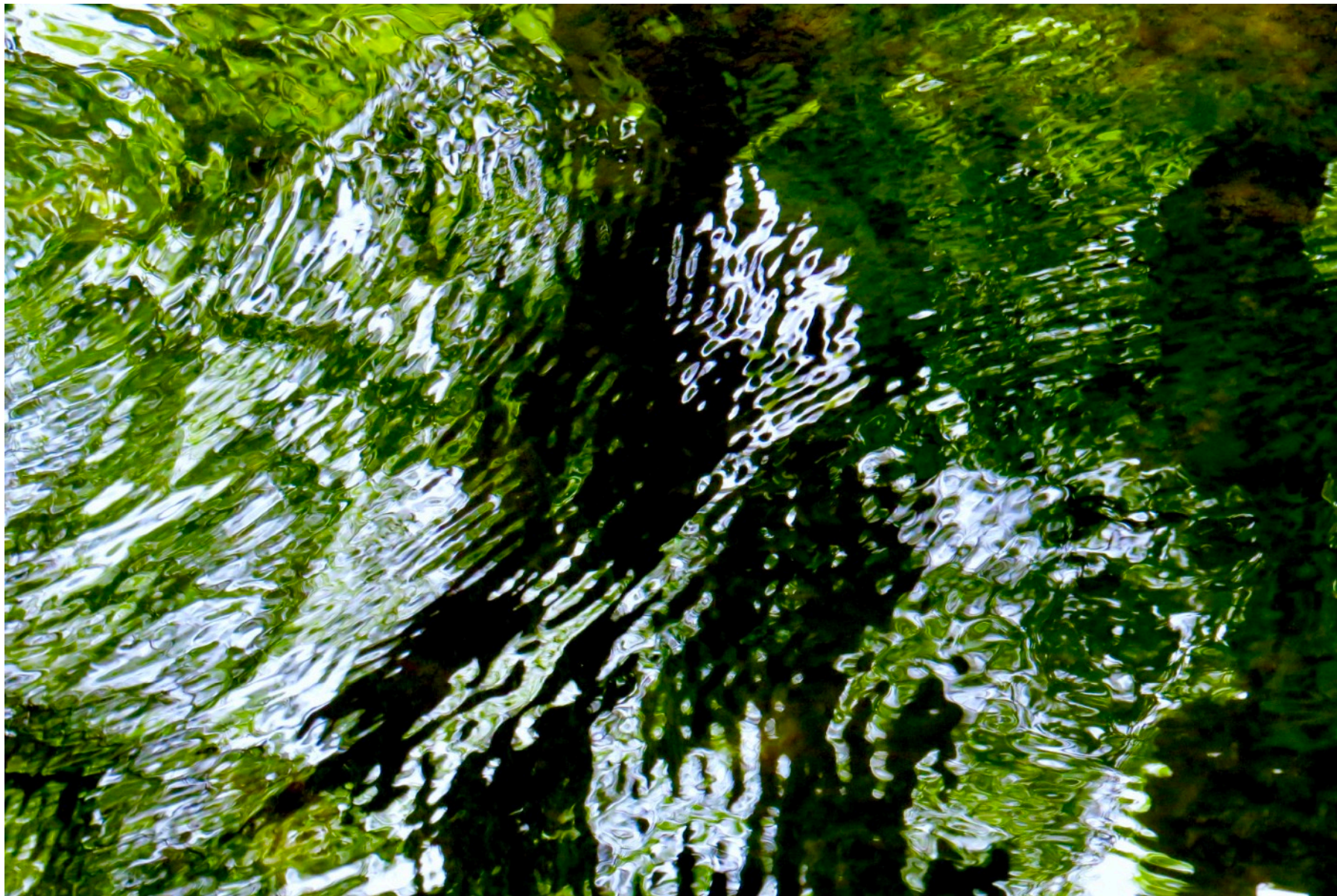
光で世界を
照らし出す
それが
わたしの秘密らしい

宇宙の秘密と
わたしの秘密

どうやら
楽人はわたしらしい
わたしは光で
宇宙を照らし
宇宙はわたしを奏でている



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて



ひとはじぶんの
影に怯えている

光は影をつくり
いつもともにいる

けれどその影を
じぶんだとは思わない

影の気配を感じるだけで
そこから目を逸らしてしまう

影をじぶんだと
思いたくはないからだ

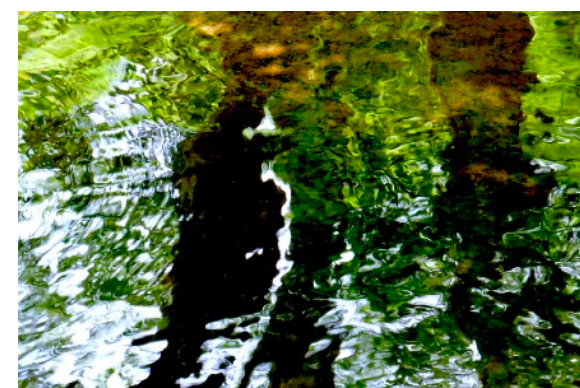
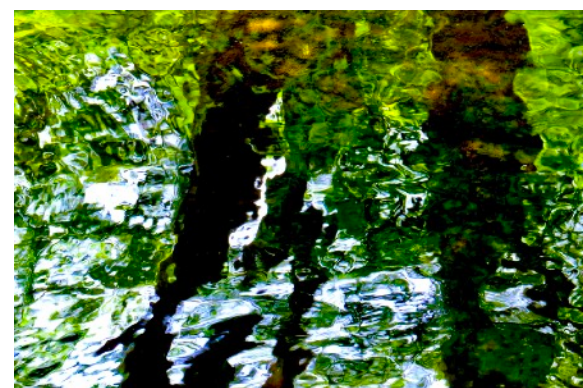
怯えて逃げるか
他者に投影して攻撃するか

けれども影は
じぶんそのものなのだ

逃げても影はついてくる
攻撃してもじぶんを痛めつけるだけだ

影をじぶんだとわかったとき
ひとはじめてじぶんの光にも気づく

そして光と影は
わたしのなかで結ばれてゆく



☆photopos-2497

2021.7.9



天と地の
あいだで
遊び戯れる
風のように

海と陸の
あいだで
生まれゆく
命のように

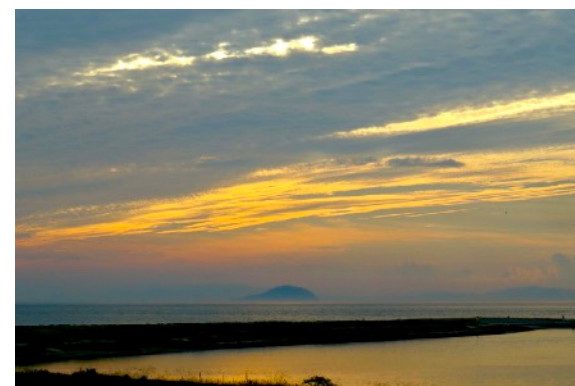
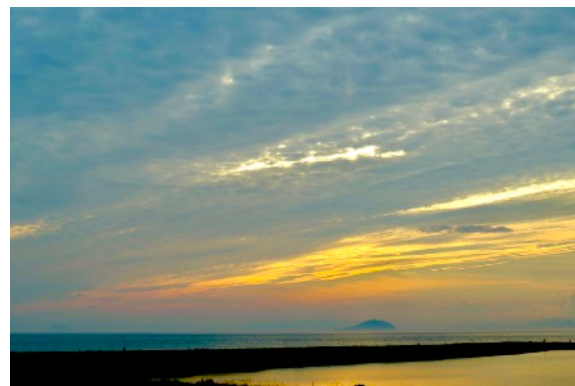
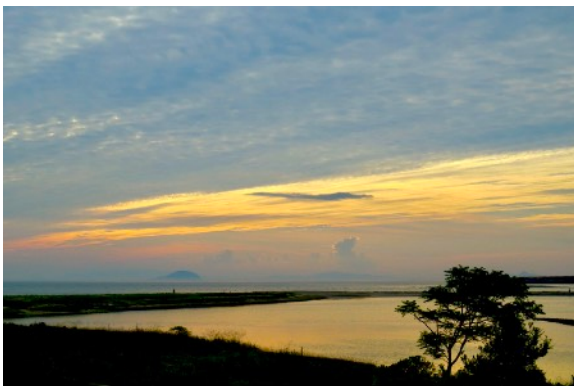
光と闇の
あいだで
変容する
色のように

心と体の
あいだで
ゆれる
魂のように

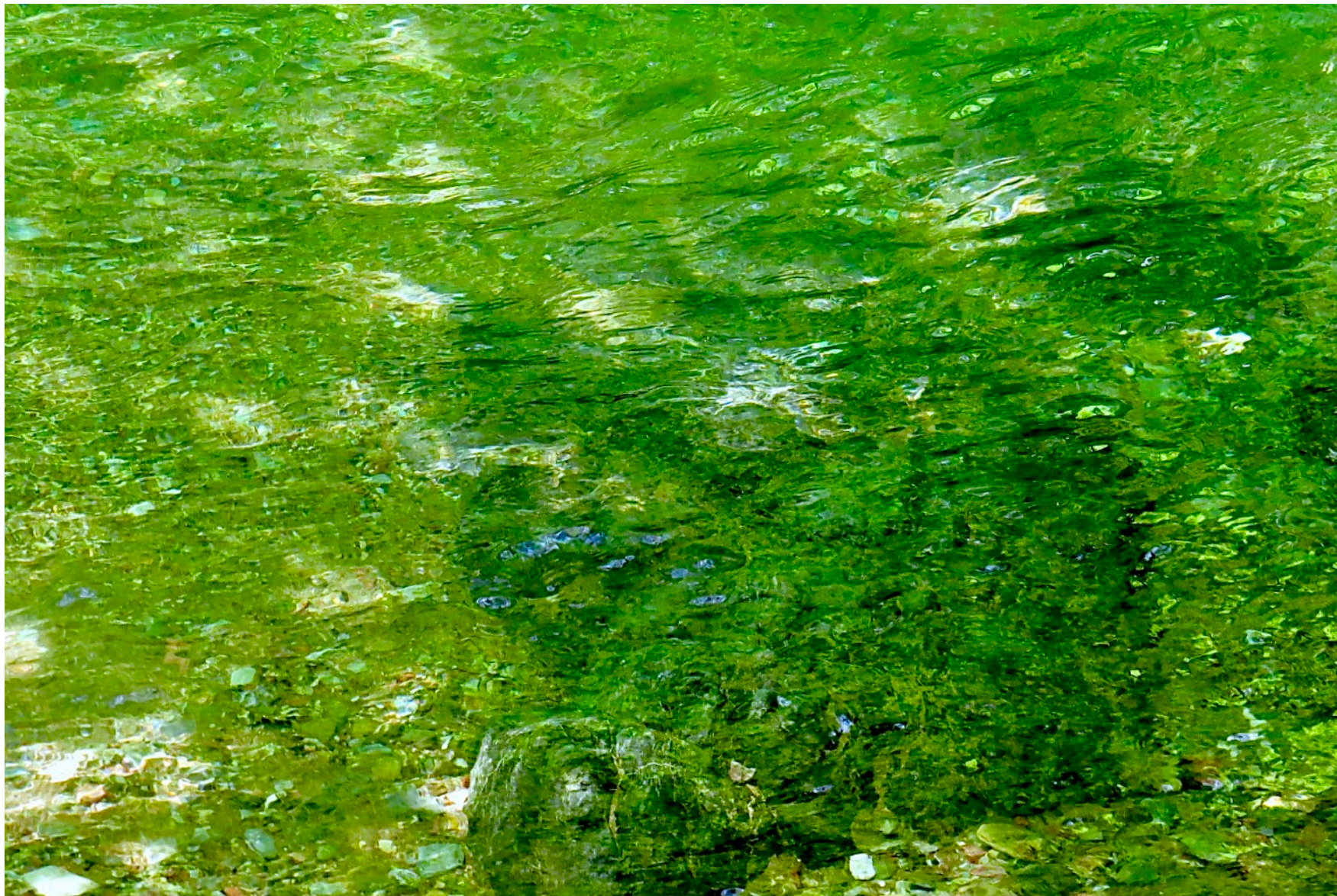
我と汝の
あいだで
交わされる
歌のように

生と死の
あいだで
反転する
時空のように

あいだを
夢み
あいだを
生きる
私という
謎のような巡礼



※愛媛県松山市・重信川河口にて



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

世界を変えるということは
じぶんを変えるということ

いまのじぶんを鏡に映して
変わりたいのか
変わりたくないのか
それを問うことだ

世界を変えるには
そこからでも遅くはない

あるがままであるということは
あるがままのじぶんを認めること

いまのじぶんを鏡に映して
あるがままのじぶんがいいのか
別の姿であるじぶんがいいのか
それを問うことだ

あるがままでいるには
そこからでも遅くはない

できないということは
できないじぶんにいるということ

いまのじぶんを鏡に映して
できるのがいいのか
できないでもいいのか
それを問うことだ

できないというには
そこからでも遅くはない

信じるということは
信じているじぶんを
信じているということ

いまのじぶんを鏡に映して
ほんとうに信じているのか
ほんとうはそうではないのか
それを問うことだ

信じるには
そこからでも遅くはない



淋しいのは
ひとりだからじゃない
淋しいのは
心があるからだ

心はいつも
存在の淋しさを
蒼いほどに
呼吸している

淋しさを
紛らそうとする
あらゆる行為は
津波のようにまた
淋しさとして返ってくる

けれども
私が畢竟
私でしかないという
淋しさは
むしろ恵みなのだ

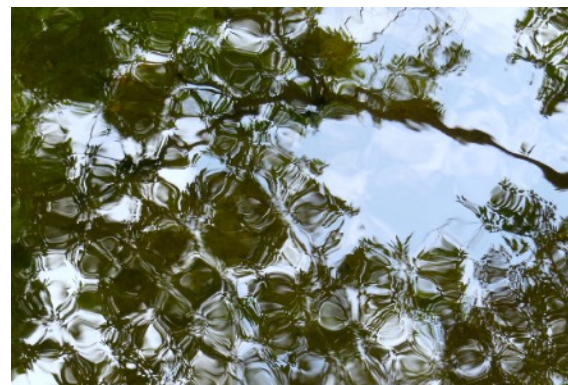
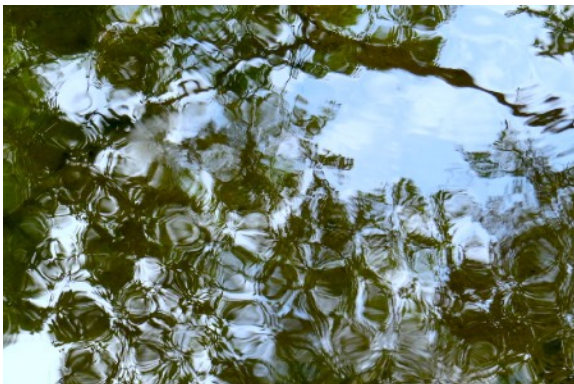
その恵みは
災いにさえ
なることもあるのだが

それにもかかわらず
心は
かつて神々から
贈られたものだ

神々はすでに姿を消し
心にその名残を
残しているばかりだが

私でしかない私は
ひとりの心で
その恵みを
育てなければならぬ

淋しいのは
心があるからだ
そして
心ゆえに
私は深まってゆく





見ているのは
じぶんだろうか

じぶんが見ているとき
見えているものは
じぶんの投げた幻ではないか

ほんとうに見ているとき
わたしの眼は
光の使いとなって
見られるもののところに
招き入れられている

考えているのは
じぶんだろうか

じぶんが考えているとき
考えていることは
埋葬された記憶の欠片ではないか

ほんとうに考えているとき
わたしの思考は
深みから湧き出す泉から
流れ出すエーテルを受ける
生まれたばかりの器となっている

